【解説】

フロムについては、フランクフルト学派のメンバーとして教科書でも後半で登場するが、ここではあえて順序を入れ替えて、ナチスドイツとフランクルの関係を扱ったついでに学習しておく。ここで扱う権威主義的パーソナリティの知識が、このあと学習する古代ギリシアの「ソフィスト」の勝利至上主義や、古代ユダヤ教の「律法主義」などを理解する際に手助けとなるからである。

権威主義的パーソナリティは、人間関係を上下関係でとらえ、「上」に従順な一方で「下」には攻撃的である特徴をもつ。このような垂直的人間関係（＝「タテ社会」）に適合的なパーソナリティは、日本社会においてはよく見られるものである。日本社会は江戸時代以降、上下関係を重んじる儒教（とりわけ朱子学）の影響を強く受けており、戦後もその影響を完全には払しょくできていないからである。

しかし、人間の本質的平等という価値に立脚する民主社会は水平的人間関係（＝「ヨコ社会」）であり、本質的に「タテ社会」とは大きく異なる（＝対極に位置づけられる）。この点をおさえておくことが、今後ソフィストに対するソクラテス、ユダヤ律法主義に対するキリスト教、あるいはイスラムの各思想、さらには近代の社会契約説や立憲主義の考え方を学習する際に、理解を助ける。

本の紹介

フロム『自由からの逃走』創元社

フロム『愛するということ』紀伊國屋書店

香山リカ『「独裁」入門』集英社新書

中根千枝『タテ社会の人間関係』講談社現代新書